

持続性ある栄養補給で 遺伝性疾患を改善。

本誌では、これまでがんと糖尿病など比較的身近な疾患にかかった人を取り上げ、栄養療法で状態が改善したケースを検証してきました。今回は、血液系の遺伝性疾患で生まれてきた子どもが発育、成長過程で栄養補給を実践し、改善がみられたケースを紹介します。



京都府にお住まいの50代の男性夫婦は、今から14年前に4番目の子どもを授かりました。元気に生まれたのですが、2か月ほどして授乳中に耳の下のリンパ腺が腫れていることに母親が気づきます。そういえば、へその緒を切ったあとがじゅくじゅくして治らないなど気になることがありました。

と診断されます。「血液中の好中球がゼロ」で、医師からCRP（炎症反応が起きているときに血液中で上昇するタンパク質の値）が異常に高いことを知らされます。

好中球、すなわち白血球の一つがゼロだと免疫機能がせず、感染症や体に様々な炎症が起きやすくなります。子どもはすぐに自宅近くの病院に入院し、紹介を受けた病院の医師と連携して原因を探るための精密検査を受けます。結果、骨髄で血液が正常に造られているものの、はつきりした原因はわか

らないまま、最終的に「骨髄移植」をすすめられます。父親である男性は、すぐには受け入れられませんでした。移植となると、型が合うドナーが見つかるかわかりませんし、仮に見つかってうまく移植できても、副作用など体に負担がかかるかもしれません。生後まもない子どもに負担を強いるのはあまりに忍びない。

そこで男性は、ボタニック・ラポラトリーの森山先生に相談します。男性は、若い頃からアトピーに悩まされ、知人を介して森山先生が提唱する正常分子栄養学と出会います。そこで医療や薬だけに頼らない栄養の大切さを聞かされ、食事やサプリメントに気を配るようになったといいます。以来、森山先生の講演があるたびに出かけていき、家族のことを含めて相談する関係になっていました。

森山先生からは「治療や手術のリスクを少なくするためにも栄養補給した方がいい」とアドバイスを受けます。とはいっても赤ちゃんに直接、栄養補給はで

きません。男性は妻と相談し、ビタミンE、ミネラルなどを多く摂取し、母乳から子どもにも栄養補給するようにしたのです。

当時はボタラボグリーンやキャロット、植物ミネラルなどの製品がまだなく、森山先生のアドバイスのもとサプリメントで補給しました。その結果、1ヶ月後のCRPは、栄養補給前は10〜15だったのが、5〜7にまで下がったのです。医師は驚きを示し、男性は「栄養の力では」と感じはじめます。

しかしこの病気は簡単ではありませんでした。この後、家族の闘いは、10年以上も続くこととなるのです。(つづく)



あきやましんいちろう
秋山 真一郎

医師・医学博士、カナダマギル大学臨床腫瘍学客員教授。NPO法人がんコントロール協会理事。がん免疫治療と植物栄養素を中心とした免疫栄養療法など、副作用のない多角的療法で成果を上げている。